真如苑の研究

沼田健哉

1. はじめに

真如苑は，立川市に本部を有し，真言宗醍醐派とかかわりが深く，かつ現在最も教勢の伸びの著しい教団として注目される存在である。文化庁発行の『宗教年鑑』による信者数の推移は，以下の如くである。昭和40年＝12万5210人，昭和50年＝29万6514人，昭和55年＝68万5284人，昭和57年＝106万4220人，昭和58年＝129万8945人，昭和59年＝154万7995人，昭和60年＝181万5656人，昭和61年＝207万9954人，昭和62年＝233万6633人，昭和63年＝245万5015人，平成元年259万6102人，そして，現在の公称信者数は，約280万人とされている。

さらに，同教団は，芸能人の信者が多いことでも知られており，沢口靖子・島田陽子・高橋恵子・大場久美子らをはじめとして，天地総子・小森和子らも信者の一員となっている。それ以外にも，多くの学者・文化人・スポーツマンらが信者となっており，その教勢の伸びは，とどまることを知らないのが現状である。

以下，当論文においては，いかなる要因により真如苑の信者数が伸びているかを主たる研究の課題とするが，それに際して，カリスマとその担い手，さらには，シャーマニズムに関し，若干の言及を試みることにしたい。

カリスマとは，非日常的なものとみなされたある人物の資質であり，「この資質の故に，彼は，超自然的または少なくとも特殊非日常的な，誰でもがもちうるとはいえないような力や性質に恵まれていると評価され，あるいは

神から遣わされたものとして，あるいは模範的として，またそれ故に『指導者』として評価されることになる。」[1]

カリスマは，被支配者の意識の内部的変化からその革命的力を示し，その最高の現象形態において，規則や伝統一般を破砕する。カリスマは，価値中立的な概念であり，現代においては，その衰退と製造・演出される側面を指摘する者も少なからずいる。

さらに，カリスマの主たる担い手である教祖という概念は，島薗進により，「一つの宗教伝統の創始者」と定義されているが[2]，西欧においては，一神教であるキリスト教の下にあるため，ふつうの人間が宗教を創始するという観念が生じにくく，教祖の多様性が見落とされがちであるという。

そのためもあってか，ウェーバーにおいては，教祖に相当する存在はすべて預言者の範疇にくくられている。ウェーバーは，預言者を，「みずからの使命によってある宗教的な教説ないしは神命を告知するところの，もっぱら個人的なカリスマの所有者」と定義し，以下のように述べている。

「かかる預言者が，ある（実在の，または架空の）古い啓示を今いちど新たに告知するのか，それとも実際に新しい啓示をもたらそうとするのかという点では，いいかえれば，彼が『宗教革新者』として現われるのか，それとも『宗教創始者』として現われるのかという点に関しては，いかなる原理的な区別もしないで置きたい。両者は互いに他方に移行することがありうるし，とりわけ，彼の告知から一つの新しい共同体が成立するにいたるかどうかという点は，預言者自身の意図いかんによることではないからである[3]。」

さらに，真性カリスマである預言と呪術の関係に関していえば，ある預言者がカリスマを有しているということは，彼がきわだって偉大な呪術師であるというように考えられているということである。預言者にとって，呪術的カリスマは，正統性を主張し，服従をかちとるための手段であるとみなされ

1）マックス・ウェーバー世良晃志郎訳『支配の諸類型』創文社，1978年70頁。
2）宗教社会学研究会編『教祖とその周辺』雄山閣出版，1987年11頁。
3）マックス・ウェーバー武藤一雄他訳『宗教社会学』創文社，1976年，64頁。

る場合も多い。預言者は，もっぱら個人的な天賦の能力により活動し，彼が呪術師から区別されるのは，内容ある啓示を告知し，教説ないしは誡命という形で伝道がなされる点にある。

カリスマが形成される磁場は，ある程度の呪術に対する信頼と要請があることが条件としてあげられる。さらに，現代においては，マスコミを中心とするコミュニケーション手段とカリスマの関係も無視できない問題といえよう。そして，初代教祖から二代教祖への継承も重要なポイントであり，ウェーバーも，カリスマの日常化にとって決定的なのは，後継者問題という急を要する問題の解決の仕方いかんであるとする。

さらに，真如苑は，多くの霊能者をかかえている。対馬路人の定義によれば，「霊能者とは何らかの非日常的ないし超自然的なカリスマ的力能をもつとされ，そうした力を通して信徒の救済，指導にあたる役職者[4]」である。彼らは，自分の獲得した能力により，教団の枠から逸脱する可能性が相対的に高く，信者とのあいだにしばしば強い帰依関係をつくり出す可能性がある。したがって，それをいかに統制するかが教団にとって重要な課題としてあげられる。

ついで，シャーマニズムは，佐々木宏幹によって以下のように定義されている。「通常トランスのような異常心理状態において，超自然的存在（神・精霊・死霊など）と直接接触・交流し，この過程で予言・託宣・ト占・治病行為などの役割を果たす人物（シャーマン）を中心とする呪術—宗教的形態[5]。」そして，トランス（trance）は，意識の例外状態とされ，エクスタシー（ecstasy）＝脱魂（魂の旅行）とポゼッション（possession）＝憑霊（霊の憑依）に区分される。

日本では，圧倒的に憑霊型シャーマンが多いのであるが，憑霊には「憑入」「憑着」「憑感」の三つの型がある。憑入型は，人格転換を起こし，直

4）井上順孝他編『新宗教事典』弘文堂，1990年，158頁。
5）佐々木宏幹『シャーマニズム—エクスタシーと憑霊の文化』中公新書，1980年，41頁。

接話法で語り，神霊が体から離れた後には何を語ったか覚えていず，この型のシャーマンは，「霊媒」と呼ばれる。ついで，憑着型は，神霊が身体をつかんだり，身体に付着したりする型であり，この型のシャーマンは，「予言者」と呼ばれる。その特色は，神霊と会話ができ，後にも会話の内容を覚えていることにある。憑感型は，外側から神霊の影響を受けて，神霊を見たり，その声を聞いたりする型であり，神霊と会話ができず，「見者」と呼ばれる。なお，予言者型と見者型の両シャーマンは，実際には混じりあっていることが多く，「広義の予言者型シャーマン」と呼ぶこともある。

以下，当論文においては，まず真如苑の歴史について言及し，ついで，当教団の概要を述べる。しかる後に，とくに，真如霊能と接心修行に焦点を当て詳細に分析の対象とする。最終章においては，ウェーバーのカリスマ論と佐々木宏幹のシャーマニズム論からみた真如宛の位置づけを現在可能な範囲で行ない，しかる後に，真如宛の教勢拡大の要因をさぐることにする。以上の分析を通じて，現代日本における宗教のあり方，さらには現代日本社会そのものの研究に関する端緒が切り開かれれば幸いである。

2. 真如苑の歴史

真如苑の教祖・伊藤文明（後の真乗）は，明治39年３月28日，山梨県北巨摩郡秋田村大字大八田に，父・伊藤文二郎，母・よしえの次男として生まれた[6]。大八田は，八ヶ岳の南麓にある，山に囲まれた盆地の農村である。小学校では，理科と書道と図画が得意であり，算術が苦手であった。

6）当章の論述は主として以下の資料による。
山口富夫『真如苑―常楽我浄への道―』知人館1987年
ひろたみを『ルポルタージュ真如苑』知人館，1990年。
三土修平『水ぶくれ真如苑』ＡＡ出版1987年。
伊藤真乗編著『一如の道』真如苑教学部，1984年
伊藤真乗『燈火念念』真如苑教学部，1985年。
井上順孝他編『新宗教事典』弘文堂，1990年。

父・文二郎は，村の収入役や，村会議長も努めた人物であり，「親分」と呼ばれる家筋の当主であった。そのためもあってか，伊藤は，おたふく豆という大きな豆をナイフで刻んでたくさんの人形を作ったこと等により，「神童」と呼ばれもした。伊藤は，近所の老人の死を予告したり，さらにある人物の死に方までも予知したという。その後，もと伊藤家の墓地といわれるところで古い鏡を拾い，家に持ち帰り磨いていると，未来のことが映し出されるようになった。そのうち，それを見なくても分かるようになり，いろいろ予言をするようになったが，それがよく当たったという。

伊藤の母は，彼の夜尿症を治したい一心で，天理教の信仰に入った。伊藤も，よく教会に連れて行かれ，教えを学んだ。秋の収穫が終わり，お礼の米俵を教会へ運ぶ時，母は伊藤に，「大きくなったら，神さまのご用をつとめるのだね」と言い聞かせたという。しかし，伊藤の持病は，大師信仰の篤い婦人が治し方を教えてくれたことにより，しばらくして治った。

一方，父は，朝陽山清光禅寺の住持のもとによく参禅していて，かなり禅の道を究めていたようである。さらに，伊藤家には，遠い祖先から「甲陽流病筮鈔」という家伝の易書が伝わっていた。それは，五行易と断易とを折衷して『甲陽軍鑑』の原理を裏うちしたものであり，永田徳本という，武田家に関係の深い漢方医が，それをもって，将軍の診察にあたったという。父は，「この伝承は“口伝”を尊ぶ。また絶対に営利（金儲け）のために用いてはならない。」と述べ，兄弟姉妹6人のうち，伊藤だけが，口伝により伝承した形になった。

伊藤は，高等科を終え，大正10年農業補習学校を卒業後，同年5月，社会勉強のため，北海道旭川へ父の知人を訪ねていき，7月6日の父の訃報に接したが，そのまま11年6月まで滞留した。そして，大正12年7月，苦学する決意で二人の叔父をたよって上京した。二人は，伊藤の苦学に反対したが，同年8月，中央電信局の購買部へ入り，そこの責任者の好意で，夜学に通えるようになった。

そこに勤めながら，大正13年４月，正則英語学校の普通科に入学し，翌年３月，そこを卒業して高等科に進んだ。しかし，１カ月後，青年訓練所に入らなければならなくなり，高等科をやめた。まもなく，購買部を退き，大盛堂という写真器材店に入った伊藤は，ラジオの組立てに成功し，当時で３千円もの預金ができるようになった。さらに，そのころ，写真家の有賀氏のもとに弟子入りして，その技術をも修得した。

ついで，大正15年４月，徴兵検査に合格し，昭和２年１月，立川の近衛飛行第五連隊に入隊した。翌３年12月に除隊し，４年１月に，石川島飛行機の技術部に入社した。当時，小石川にある“石竜子”の大日本易占同志会に入会し，夜間の講義を受け，教師免状をもらった。

昭和５年には，会社が月島から立川に移転し，伊藤も立川に移った。彼は，病筮鈔により，人生相談を受けたり，会社の問題を解決したりした。そのため，検査課長から，「会社のことを専門に観てほしい」と言われたが，あくまで技術者でいきたかったこともあって断わった。当時，病筮鈔を共同研究していた社内の友人の夫人が，日蓮宗の寺院へしばしば案内してくれて，法華経とも結ばれた。

昭和７年４月27日に，伊藤は，またいとこの関係にある内田友司（ともじ）と結婚した。友司は，明治45年５月，伊藤の生地から６キロほどしか隔たっていない，北巨摩郡高根村東井出に，父・内田義平，母・もとよの長女として生まれた。友司は，４歳で父と死別し，母が再婚したこともあって，ほとんど，祖母（宝珠院）の手により育てられた。この祖母は，霊能者であり，その感化によって友司は，薬師如来と観音の信仰を持っており，文明も観音信仰に興味をおぼえ，その教義の勉強に打ち込むようになった。

しかし，結婚してまもなく，部下の仕事にミスが続いて起こり，７月には，伊藤自身が軽い肺の病気にかかり，二カ月あまり静養せざるを得ないという事態が生じた。回復後，姉の住居の隣りの吉祥寺の家に移ったころ，熱心なキリスト教徒である姉から信仰をすすめられ，新宿のプロテスタント教会へ

よく連れていかれた。当時，伊藤は，暇をみては聖書のページをめくっていた。また，姉の家で出会った心霊科学協会の会員との交流から，神秘的物理現象の話，超科学現象の世界にも触れたが，それは後の宗教家としての生活に大きな影響を与えた。

昭和8年5月には，長女英子が生まれ，6月，母子が帰京すると，立川の曙町に転居した。当時，伊藤は，朝夕観音経を読誦していたが，8年から9年にかけて，病筮鈔の同好者が集まるようになった。そして，昭和9年7月29日には，長男の智文が生まれ，10月には，南幸町に転居した。

当時，大堀修弘という僧が訪ねてきて，「易を教えてほしい，その代わりに私の知っている真言密教を，すべて呈上する」という提案をした。そののちに，大堀は，師匠の醍醐派の僧侶である浦野法海を紹介した。

昭和10年12月28日，伊藤は，自宅に運慶作と口伝される，大日大聖不動明王を迎えた。そして，11年1月4日から，30日間の寒修行を行なった。1月30日，伊藤は，友司に信仰専従に立つことを提唱した。それは，寒修行を進めていくうちに，伊藤家本来の使命を感得したからであるが，友司は生活上の不安から反対した。

しかるに，1月31日，帰宅した伊藤に対し，友司は，「衆生済度の道ひとすじ」を提唱してきた。それは，深い祈りに入った友司が，黒い衣を着て赤い机（経机）の前に座っている伊藤の姿を透視し，「主人の歩む道はここにある。みほとけと共に衆生済度のこの一路にある。どんなに苦しかろうと，必ず共にやりぬいてまいります」と固くほとけに誓ったからという。

そして，寒修行満願の2月3日，ご宝前に祈っていた友司が，深く入神し，頭上に蓮華印を結んで感応状況に入った。その時，たまたま来合わせていた伯母の玉恵が音もなくそばへ来て友司と対座して，「顕より密に入り，正しく修行し，世のため人のために正しく道を貫くべし[7]」と声を放った。しばらくして，友司が我にかえった時，伯母は頭上高く日天の印を結んで入神し，

7）これを真如苑では「根本霊言」といっている。

彼女はその前に祈っていた。ここに，友司は伯母から祖母宝珠院の霊能を相承したことを告げられたが，時に昭和11年２月４日，午前１時であった。そして，２月４日から８日まで，伊藤と仏の対決が続いた後，８日辞表を提出することにより，親子四人は，宗教ひとすじの生活に入った。真如苑ではこの日を立教の日と定めている。

伊藤は，浦野の提案により，３月28日，成田山新勝寺の講中として，立川市南幸町の自宅に「立照閣」の看板を掲げた。そして，昭和11年５月19日，伊藤は，真言宗醍醐派総本山醍醐寺にて得度した。

しかし，昭和11年６月９日には，長男の智文（１年10ヵ月）が他界するという思いもかけぬ事態が生じた。その６日後，二人は，高尾山の蛇滝で滝行を行ない，その行は，それから20年ほど続いた。夜を徹しての滝行以外にも，手蠟の行等のきびしい修行が行なわれた。その一方，智文が亡くなると同時に，信者の間に人智を超えた現象が相ついで現われ，皆，「智文さまのおかげだ」と感じとったという。さらに，生前の智文は，信者が自己本位のご利益信心しかない場合にはその相談を妨げたりすることにより，後の「霊劇」の基礎を示したという。その上，智文は，霊界に旅立つにあたり，友司の不動明王の真言に独特のメロディーを残し「ご霊咒（れいじゅ）」と呼ばれるものを確立したとされる。智文は，単に死去したのではなく，百カ日を機に友司に感応し，「即時入神，霊言発露」を可能にさせ，祖先霊との道交を開き，真如接心の基を築かせたという。

その後，信者は順調に増加し，狭い宝前は修行の人で埋まるほどであった。そのような中で，昭和12年４月８日，次男友一が釈迦生誕の日に生まれた。そして，昭和13年10月３日には，現在の真如苑総本部の地に「真澄寺（しんちょうじ）」と呼ばれる道場が竣工し，同時に，「立照閣」を解消して「真言宗醍醐派立川不動尊教会」を設立した。

伊藤は，昭和14年10月，真言宗総本山醍醐寺にて恵印灌頂を授かり，昭和16年３月には，金胎両部伝法灌頂を授かって，伊藤真乗と名乗るようになっ

た。戦時中，真言宗の大同団結のため，「真言宗・立川不動尊教会」となったが，戦後，真言宗を離脱して，既成のいずれの宗派にも所属しない単立教団の体制をとり，涅槃経を所依の経典とする仏教界唯一の教団となったとしている。

この間に，次女孜子（昭和15年），三女真砂子（昭和17年4月25日），四女志づ子（昭和18年10月5日）と相次いで誕生した。昭和21年11月6日から12月7日まで，「まこと基礎行」が行なわれ，11月4日に友司から霊能を相承した栗山乗心につぎ，霊能者があいついで誕生した。これは，後述する現在の大乗会・歓喜会・大歓喜会を一括した大接心会とみなすべきものである。昭和22年4月には，友一が10歳の若さで霊能を相承した。この事実により，人々は霊能開発に年齢の条件はないことを知り，一斉に修行への気持ちをふるいたたせたという。

そして，昭和23年1月には，「まこと教団」の設立をみた。この年には，真澄寺開基10年祭を行なったが，信者数も5万人余となり境内はわきかえるような賑わいを呈したという。

昭和25年の春頃から26年の暮れにかけては，日本心霊協会から独立し，宗教法人となった「白龍閣」という団体に，まこと教団から霊能指導という形で参加した。

しかし，昭和25年8月20日，伊藤は，彼と対立して昭和24年秋，教団を去った荻野という青年の訴えにより逮捕された。荻野の言によれば，彼は伊藤から修行の名によるリンチを受けたという。この事件は，マスコミをにぎわし，「まこと教団事件」と呼ばれ，昭和31年3月には，その高裁判決があり，伊藤は，懲役7カ月，執行猶予3年の判決に服することになった。

この事件による打撃は大きく，教団は危機的状態になった。そのためもあって，昭和26年6月21日には，まこと教団を「真如苑」と改名し，伊藤は管長を辞して教主となり，友司が苑主に就任するという形態をとった。真如苑は，27年，宗教法人の認証申請を行ない，翌28年5月16日，文部大臣の認証

を受け「宗教法人真如苑」となるに至った。この時，「まこと基礎行」を「接心修行」と改めたりして，新時代に即応する仏教教団としての体制づくりをした。

しかし，昭和27年７月２日，次男友一（15歳）がカリエスで死亡するという事態が生じた。臨終にあたって，友司は，「お前，男なら潔く智文兄さんのところへ行って，力を合わせて“抜苦代受（ばつくだいじゅ）”の基となるのだよ」という最後の言葉を与えたという。真如苑では，その後，夭折した長男と次男の二人を「両童子様」と呼び，教義上「抜苦代受」という重要な働きの担い手として位置づけている。

昭和32年11月には，伊藤自ら彫刻した釈迦涅槃像を接心道場に安置し，開眼供養がなされた。この後，昭和53年末までに50体余りの尊像が製作された。昭和33年５月20日には，接心道場が落慶し，昭和39年５月13日，兵庫県芦屋市に関西本部が落慶した。

昭和41年７月30日には，タイの寺院ワット・パクナムから仏舎利が贈呈され，同年11月，伊藤夫妻は，ワット・パクナムへの答礼と「第八回世界仏教徒会議」出席のためタイを訪れた。さらに，昭和42年６月11日から７月４日にかけて，伊藤夫妻は，「欧州宗教交流国際親善使節団」を組織して，欧州八カ国を訪問した。しかし，その後間もなく，友司は，８月６日関西本部で突如死亡した。８月８日，真言宗醍醐派は，友司に「大僧正」の僧位をおくり，以後友司は，「摂受院友司慈凰大僧正」と呼ばれている。

友司の死後，伊藤の再婚問題をめぐって，四人の娘が反対し，次女，三女，四女が教団から飛び出るという事態が生じた。二年後，三人は教団に戻ったが，かわりに長女とその夫が教団から追放され，幹部の一部からも脱退者がでた。

昭和46年３月２日には，ハワイに初の海外支部が開設され，同年４月22日，渋谷区広尾に開設の東京本部の地鎮壇鎮，並びに入仏開眼の儀が執行された。昭和50年７月４日には，豊中市に大阪精舎が開設され，西日本の拠点となっ

た。昭和51年5月19日には，「醍醐山開創一千百年慶讃法要」の最中に，「真如苑慶讃怨親平等廻向法要」を営み，2600名の真如苑教徒の代表が参列した。

昭和51年11月18日，伊藤は，今東光が貫主を務めていた平泉の中尊寺に釈迦涅槃像を贈呈した。ついで，昭和58年10月15日，総本部にて「真如法灯継承の儀」が行なわれ，三女真砂子と四女志づ子が，「両法嗣(ほつし)様」として，正式に伊藤真乗の血脈相承者となった。真砂子は「真聡様」，志づ子は「真玲様」と呼ばれていた。昭和59年4月24日，伊藤真乗，ならびに両法嗣は，多数の信者と共に醍醐寺において，「真如法灯継承奉告法要」を営んだ。

その後，教勢は順調に拡大していったが，平成元年7月19日午前零時23分，伊藤は，急性心不全のため死亡し，83歳の生涯を終えた。それにともない，11月3日の秋の大祭において三女は「継主」，四女は「雍主」となり，「両常慧様」として教団のトップの座につき，現在に至っている。

以上のような経過により，修験系の行者から出発した伊藤は，家伝の易書と妻の霊能を用いつつ，信者寺の住職から，新宗教教団の教祖となるに至った。その過程の特色としては，ふつう不利な事件とされる，子供や妻の死をきっかけとして教団が拡大してきたことがあげられる。そして，現在真如苑は，伊藤の死を乗り超えて，より一層の教勢の拡大を目指しているといえよう。当教団は今や，公称信者数において，創価学会・立正佼成会・霊友会に次ぐ，第四位の教団となり，衆目を集めつつある。

3. 真如苑の概要

真如苑では，みずからの特色として以下の六つをあげている。

①出家仏教の修行を基礎とした在家仏教教団であること。

②大般涅槃経を所依の教典としていること。

③教主伊藤真乗自らの謹刻による涅槃像を本尊としていること。

④両童子による“抜苦代受”があり，教徒の業苦や因縁を代わって受けていくということ。

⑤摂受院（友司）による“摂受”があり，諸宗教の和合を目的とした，済度の道が開かれていること。

⑥霊能者による接心修行が行なわれ，これによって教徒たちは大般涅槃の精神に帰していくということ[8]。

これらのうち，第一項を除いた後の五つは，真如苑独自のものであり，現代日本の宗教界に比類ない存在とされている。

大般涅槃経は，釈迦の入滅を主題とする根本的な経典であり，小乗の涅槃経と大乗の涅槃経とがある。真如苑が所似の経典としているのは，西歴一世紀頃成立したとされる大乗の涅槃経である。伊藤は，「五時の教判」にもとづき，涅槃経の方が後に説かれたものであることもあって法華経より上の経典であるという主張をしている。そして，涅般経には，以下の四つの願目があるとする。

①「如来常住」（如来は生死を越えた存在で，永遠に存在する）

②「一切悉有仏性」（人間はみんな仏になれる性質を持っている）

③「闡提（せんだい）成仏」（闡提―善根をなくしてしまった者―でも成仏できる）

④「常楽我浄」（涅槃の境地に至れば，常と楽と我と浄の四つの徳を得られる[9]）

伊藤は，「真の仏教者は仏像も自分の手で彫るものである」という信念のもとに，多くの仏像を彫っている。かつては，空海や最澄をはじめ多くの僧侶が自らの手で彫っていたが，現代においては他に例をみいだすのが困難である。

抜苦代受とは，真如教徒が一如の道を歩むにあたり，因縁の重荷を代わって負ってもらうことに現われるとされる。両童子の他界後，苑には力強い救いの力がつぎつぎと現象に示されたという。教徒が両童子と霊的交渉を持つのは接心会座であるが，その際には，まず双親（そうおや）（真乗と友司）への帰順と仰

8）真如苑教学部編『涅槃への道』真如苑総本部，1974年，23―24頁。
9）ひろたみを『前掲書』102頁。

慕が第一である。双親への帰依を通して両童子につながり，そして仏につながるという順序は絶対であり，これを踏み外して抜苦代受の力に浴することは不可能であるとされている。

摂受とは，すべてを摂（おさ）め受け入れ，涅槃（さとり）へと至らしめることであるとされる。その本来の意味は，一般に，衆生の迷いを摂受・容受し，真実・教えに導き，御仏の慈心をもって人々の邪心を浄め，菩提護法の心を育てることである。

これらをまとめると，両童子による抜苦代受とは，真如苑という教団とそこに集まる教徒を対象とし，その教えや行ないに導くものである。これに対して，摂受院による摂受とは，殉教の上をいく精神を示すもので，御仏の慈悲によって，ことごとく人々を真の救い（涅槃）へと導くことといえる。つまり，仏教のみならず世界のあらゆる宗教の摂受・和合を目的とした，さらに大きな済度の道を示したものとされる。

接心修行とは，真如苑の核心を形成しているものであり，大般涅槃のテーマによって霊能者と対座してなされる。それは，自己の主観を客観に置いて眺めるもので，自己の魂をミーディアム（Medium）鏡に写し出し，本来清浄な自己の心を自覚する苑独自の方法とされる。このミーディアムが，霊能者である。この修行は，端的にいえば仏陀の精神を把握するためにあるとされ，修行から得た精神を，日常生活に活現して奉仕と愛他に生きることが説かれている。その心を多くの人に知らせるために，真如苑では現在，教団が育成した約七百人の霊能者が重要な役割を果たしている。

真乗は，教徒と隔絶した存在とみなされており，大般涅槃経に予告されている，末法の世において東方に現れ，涅槃経の教えを説く大聖者，すなわち法身如来とされている。真如苑の大きな法要の際には，多くの場合日暈（にちうん）（太陽をとり巻く円い虹）が生じるとされ，この現象は，真乗が霊界と現象界を一体にできる存在であり，法身如来であることが天界にまで認められている証拠だとされている。このように，“生き仏”とされている教主に会った教

徒の中には，その慈悲深い姿に接し，涙が流れるのを止めることができない者も少なからずいる。

真如苑の組織は，「導き親」と「導きの子」という，タテの関係を重視している。その最小の組織を「所属」と呼び，所属が一定数以上に達すると「経（すじ）」が形成される。経は，最低百世帯であり，大きいもので二千世帯である。経は，その代表者である経親の名字をとって「〇〇経」と呼ばれ，「家庭集会」などの日常の宗教活動の単位となる。経を十前後集めて「部会」が編成され，五つの部会により「連合部」が形成されている[10]。

このように，地域的にバラバラな導きの関係を通じて，信者の指導が行なわれている。下から上へ質問等を出すことは「上求菩提」と呼ばれ，上から下への伝達は「下化衆生」と呼ばれている。このようなタテの組織に対し，横の組織として，青年部・壮年部があげられる。この組織は，同世代，同職業，同地域の人たちを結び付ける水平組織として機能している。しかし，現在横の組織は弱体である[11]といえよう。

なお，真如苑では，「お施餓鬼」と呼ばれる先祖供養を行なっており，しばしば布教においても勧誘の材料とされている。初廻向，春彼岸，お盆，水施餓鬼，秋彼岸，一如まつり以外にも，お施餓鬼は，度々呼びかけられている。

さらに，接心等において「障害霊」等が指摘された時には，「お護摩」による「お浄（きよ）め」が奨励される。その項目としては，当病平癒・心願成就・家内安全・除災延命・業務盛大・除方災・安産祈願・交通安全・学業成就・お浄め等があげられる。

顕幽一如といって，霊界での諸霊の苦しみと現世に生きているその子孫の状態は呼応している。あの世で成仏できないでいる諸霊の苦しみが，その子孫や縁故の者に，病気・事故・生活苦・家庭不和などの形になってあらわれてくる。それらの諸霊に廻向をし，この世に生きている者が修行して因縁を

10）井上順孝他編『前掲書』315～316頁。
11）ひろたみを『前掲書』179～182頁。

清めていけば，成仏が可能となりその結果として現世の者たちも幸福になることができるとされている。

人生は，徳と因縁の戦いであり，徳積みの道としては，布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六波羅密をまとめたとされる，「三つの歩み」があげられている。三つの歩みとは，「歓喜」「お救け」「ご奉仕」であり，それぞれ，布施行為・信者獲得・奉仕活動のことを意味している。

奉仕活動の一つとして，全国，千五百カ所で一万人以上の人が早朝清掃奉仕を行なっている。お救けは，強引な「折伏」ではなく，身をもって示すことが大切とされ，相手の話をよく聞くことが必要とされている。自分が変化しなければ，相手を説得させることはできないという指導がなされている。さらに，布施行為は，小我をすて金に対する執着をとる実践でもあるという。

「家庭集会」においては，経親もしくは他の幹部会員による一種の指示的カウンセリングが行なわれるが，そこでは「感謝」と「和合」が大切であると教えられる。以下の友司の「女性に与える十七訓」は，男性にとっても大切な徳目が含まれているとされている。

一　女らしくなること，一　女であることを忘れない，一　優しく，強く，一　自分本位であってはならない，一　他を悲しませる女となってはいけない，一　他のことをいう時は，まず自らを反省，一　井戸端会議をしないこと，一　自分の意見だけを主張してはならない，一　ひとの心になって考える，一　清浄であること，一　いつも微笑をもって人に接する，一　惜しまれる人になること，一　どこまでも正直であること，一　争いをおこさない，一　つつましやかであること，一　ひとを立てていく，一　必要以上の口をきいてはならない[12]。

さらに，以下の真乗の苑歌（そのうた）は，真如苑の教えを集約しているといえよう。「身は低く　常に人にと　和合して　高く菩提を　求めあゆまん」「御利益は　まこと歩みの　福利なり　歩まず乞うは邪と知れ」「他がために　尽せ

12）橘佐久夫編著『藤の花房第一集ⓒ』真如苑教学部，1985年，12～13頁。

しことは　忘るとも　受けし御恩は　忘るべからず」「感謝なき　信心こそは　消ゆる灯と　思わばそそげ　徳の油を」「他事を　即我が事と　知るならば　菩提の向上　常にありなん[13]」

これらの双親によって示された項目は，他の新宗教教団もしくは修養団体のそれと比べて大きな差異はないといえよう。しかし，真如苑においては，これらの教えを内面化するよう，種々の方策がなされている。経親等が口頭による指導をすることも多いが，重要な問題に関しては，接心を受けることが奨励され，そこでいただく「御霊言」は，より権威があるものとされている。

同じ霊言をいただくことは，向上がない証拠であるから恥とされ，与えられた霊言に真剣に取組むことが最も大切なことであると指導される。このように，家庭集会等における指導と，いわば「霊界からのカウンセリング」とでもいうべき接心による指導とがあいまって，教徒は顕著な態度変容を示すことが多い。

なお，当教団には，「智流院」という教師養成所があり，修養科一年，本科一年，研究科一年の三年制となっている。宗教学概論・仏教学概論・宗教心理・真如教学・真如事相・法儀法式・特別接心・易学(甲陽流病筮鈔)・実践伝道・苑史・教判・教制等の履修課目がある[14]。

したがって，真如苑においては，霊位向上の外に，信者獲得に励み，導いた子を教化育成することにより経親になることを目指す修行，智流学院を「卒行」し，教師資格ならびに僧階を得ていくという修行があり，教徒はこれらの三つの修行を重ねているのである[15]。

また，真如苑では，葬式はなるべく自分が檀家になっている寺でするように指導している。真言宗醍醐派をば祖山として尊重しており，その関係も良好のようである。そのためもあってか，かって醍醐寺の岡田宥秀門跡が，「古

13) 苑歌カレンダー(i)(ii)(iii)
14) 伊藤真乗編著『一如の道』真如苑教学部1984年，510頁。
15) 井上順孝他編『前掲書』342～343頁。

来からの東・台二密に加えて，ことごとくを摂受した真如密が加わり，日本も三大密教となり……」と述べたという[16]。

総本部において，真澄寺には「涅槃法身不動明王」が“教令輪身”として奉祀されている。発祥第二精舎には，「十一面観世音菩薩」が“正法輪身”として安置されている。そして，発祥精舎には，「久遠常住釈迦牟尼如来」が“自性輪身”として置かれている。

このようにして，総本部の“三輪身”は，東密の流れをくむ不動明王，台密との法縁につながる十一面観音，真如密を顕現した大涅槃像と，東，台，真如の三密の帰一を具現したものとされている[17]。さらに，真如苑においては，「八大弁才天」が“天霊系護法尊天”として，「笠法(かさのり)稲荷護法神」が“地霊系護法尊天”として，「真如教法」の「護法善神」とされている[18]。

なお，真如苑では，教徒に対し，真如苑は新興宗教ではないとくり返し教えている。そして，その根拠として，教主が真言宗醍醐派の「法流血脈」に連なっていること，著名な大乗教典である大般涅槃経を所依の経典としていることをあげている。

真如苑においては，現世利益も説いているが，同時に現世利益のためだけの信仰は，本当の信仰ではないことをも説いている。信者になっただけでも，教主の神通が及び，種々の苦難から免れるとされ，癌等の難病から救われたという体験が数多く述べられている。しかし，一方では，御利益信仰のため教主の神通が通じないという事もいわれたりするのである。

急激な教勢の伸びのためか，最近当教団は，マスコミにもしばしば登場するが，『創価学会が真如苑に食われる日』という著書が出版されたことからも分かるように，創価学会の新しいライバルとみなされつつある。創価学会をやめて真如苑に入会する者は，かなりの数に達しているもようであり，「創価学会の信者であった人は，五人以上お救けした後で接心を受けさせ

16）伊藤真乗編著『一如の道』499頁。
17）『同書』503～504頁。
18）『同書』80頁。

る」という規則を設けている。

教団の梯子は日本においてよくみられる現象であるが，真如苑の場合は入会する者が退会する者を上回っているが故に会員数が増加しているわけである。そして，その最大の吸引力は，接心修行の魅力にあるとされている。

4. 真如霊能と接心修行

真如苑では，霊現象を物理的現象と宗教的現象に分け，宗教的現象（真言密教，キリスト教のリバイバル，再臨など）を，さらに外的現象（物体浮揚など）と内的現象（透視・念写・霊言など）に分けている。真如苑の霊能は，宗教的現象の中の内的現象に相当するものとされ，それを有するものは，現代的スーパー・マンであるとされる。しかし，肉体を持ってのことであるから，不断の修行が必要とされ，スーパー・マンであるがゆえに，より一層修行しなければならないという[19]。

ところで，真如苑では，教徒であれば誰でも霊能者になることが可能であるとされている。教徒に対しては，大乗・歓喜・大歓喜・霊能という四つの霊位が設定されており，修行によりしだいに上昇が可能である。霊位向上には，信者獲得・奉仕活動・布施行為が必要な条件である。しかし，その決定は，所定の活動実績を達成した者だけが参加を許される集会である「相承会座」においてなされ，霊位の獲得には神秘的な要素が多く含まれている。

霊能者の霊能は，教義的には釈迦が説いたとされる六神通と同じものとされている。しかし，霊能者がみなそのように考えているわけではない。四つの霊位は連続的であり，霊能者のみが他と隔絶した存在という位置づけをされているとはみなしがたい。しかし，霊能者として選抜された者は，霊能者同士の修行の場である苑内接心において，しだいにその役割が遂行できるように訓練される。

これらの霊能者は，苑内の教主の定めた場所においてしか入神状態に入る

19）『同書』171～175頁。

ことができず，かつ霊能者の内部にも序列があり，修行に終わりはないとされる。霊能者になったということは，完成された存在になったということを意味せず，ある一面がみがかれることによってもなることが可能なのである。これに対し，教主は，教徒と隔絶した存在とみなされている。

教徒を対象とする接心は，以下のように分かれている。①向上接心—特に解決すべき問題を持たない教徒が，自分自身の修行として，最低月一回は参加を義務づけられる接心，②向上相談接心—自分の菩提向上，もしくは他人の教化のための相談事を持つ教徒が参加する接心，③相談接心，④特別相談接心，⑤鑑定接心—いずれも自分のかかえている問題について，解決策を必要としている接心，に分かれている。ただし，③から⑤の順に緊急性が増し，とくに，鑑定接心は，二者択一をせまられるような状況にある教徒に対処するもので，その際霊能者は，教主が習得したと同じ流儀の易占も行なう。なお，接心の難易度は，①～⑤の順に高くなっていく[20]。

これらの接心の中で根本となっているのが向上接心であり，以下においてその内容について言及することにしたい。教徒は，入信後五回以上，本部や一定ランク以上の支部での法要に参加し，さらにかつては「ご親教」と呼ばれる教主の話しを三回以上聴き，教主亡き現在は毎月19日の法翔会に参座し，かつ三つの歩みのうち一つ以上を実践することにより，接心を受ける資格が生じる。最初の三回の間は初信者とされ，向上接心のみが許され，それ以外の接心は許されない。その際には，導き親か経親がつきそうことになっている。

このような接心は，霊能者と，接心を受ける人々が対座する形式で行なわれ，その場を会座と呼んでいる。数十人の車座が，まずいくつか形成され，教徒は，両手を前に組み，「法界の定印」と呼ばれる印を結び，目を閉じて正座し，坐禅のように心をおちつけて霊能者を待っている。

「入神」の時間がくると，ドラの音が響き，輪の中にいる霊能者が祭檀に向かって祈り始める。独特の印を結び，祈りの言葉を唱えて入神した霊能者

20）ひろたみを『前掲書』26～45頁。

は，透視，インスピレーション，自分の体に自然と現われる動きなどによって「霊言」を語る。霊言は，霊界で相談した上で下されるありがたい言葉であり，一字一句まちがいがなく，その受け手にとって現在最も幸福になるために必要なものが与えられるとされている。

霊言で一番多いのは，ごく一般的な内容のものであり，たとえば以下のような例があげられる。「はい，そうです。み教えのままにしていくことが大切です。そう，教え中心にということが大切なのです。人のためにつくす行ないも“してやっている”と思ったり，行なった後に何か見返りを求めているようではいけませんよ。あくまでも無条件の心でつくしていくことが大切です。み仏さまはそんなあなたをじっと見守ってくださるのですから，そのみ心に添わせていただくことです。はい，はい，そうです[21]」

「かたよった方向だけに頭を向けていてはいけませんよ。まわりから大きく光が差し込んで来ているのですけれども，自分の思いが一つの方向にしか向いてないので，それが見えなくなっている状態が示されてまいります。み仏さまからの光がずっと差し込んで，宝物として自分にいただいているということを忘れてはいけません。単に自分がこれが好きだからと，それだけを思うのではなく，これもさせていただこう，このことにも取り組んでと，大きくすべてに心を向けていって，世のため人のために力を発揮していくあなたとなることができるのですよ。周囲から言ってもらうことを素直に行なってみた時，それが必ず将来大きな力となっていくのですから，自分を精いっぱい生かしていってください。それが，自分自身充実し，喜びになっていくことです。さあ，しっかりとやらせていただきますと，お誓いを立てて精進していってください[22]。」

これらの霊言に対し，ひろたみをは，以下のように述べている。「どの霊言も非常に抽象的で特別な意味があるとは思えないのだ。もちろん偶然に合

21）『同書』31頁。
22）『同書』33～34頁。

っているということもあろう。それとも不特定多数に共通する言葉ではなかったか，と疑ってみるのだが，どちらとも言い切れない。誰に対してでもおおよそ思い当たることをもっともらしく言うことは，簡単なようでむずかしく，むずかしいようで意外と簡単かもしれないからだ[23]。」

これに対し，長期にわたり接心を受けた経験を有する白水寛子は，霊言の内容を以下のように分類する。第一，教えに対する心構えを，教徒に再確認させるようなもの。第二，先祖や近親者の中に，不幸な死を遂げた者がいないかを問うもの。第三，対座する教徒をも含めた，現存する人間の健康状態に関したもの[24]。この分類によれば，ひろたみをが聞いた霊言は，ほぼ第一の分類に相当するものといえよう。

つまり，教徒に大きな問題がない場合には，第一の分類の霊言が発せられるが，信仰上，健康上等において問題があると察知した場合には，それに関した霊言が述べられるわけである。

霊能者の力量のほどは，真如苑に関しきわめて批判的な本の著者である三土修平の以下の記述によりうかがい知ることができる。「スーパーマンであるかどうかは別としても，この『霊能』が，常人ではなかなか手の届かないある種の特殊能力であることは本当のようだ。例えば，相談接心を担当する霊能者など，相談者と対座して『入神』すると，『火事のありさまが透視されてきます。あなたの父方の近いご先祖に火事で亡くなったかたがいらっしゃるはずです』などと言い出し，事実はそのとおりであった，という程度のことはザラにある[25]。」

接心においては，双親様，両童子様に思いをよせて祈りを深めることが大切とされ，ある教徒が，教主に対して中傷的な文章を書いた雑誌を読んだ後の接心において，「まっくらでなにもうつりません」と言われたということは，この事実を示している。霊能者は，教徒の信仰に関する事象に対して，

23）『同書』36頁。
24）森岡清美編『変動期の人間と宗教』未来社，1978年，82～83頁。
25）三土修平『水ぶくれ真如苑』ＡＡ出版1987年58～59頁。

最も鋭敏であるということができよう。

ついで，向上相談接心は，教徒が具体的な問題点を話して，それに対し霊能者から霊言が与えられるという形式のものである。

向上接心と向上相談接心が大部屋で集団で行なわれるのに対し，相談接心・特別相談接心・鑑定接心は，個室で，霊能者と相談者が一対一で対座して行なわれる。したがって，プライバシーが守られる「個人接心」とでもいうべきものである。しかし，これらの接心は，やたらと受けるべきものではなく，経親や導き親による相談では解決が困難な場合に受けるべきものとされている。とくに，鑑定接心は，せっかく積んだ徳を減少させるので，軽々しく受けるべきものではないという。

接心修行には，霊言を中心にミーディアムを対象として修行する「有相行」と，有相行から得たものを土台として日常生活のうちに活かし，あらゆるものに対応して心と口と身の行ないを浄めていく「無相行」とがある。この接心は，真如教徒としていかにあるべきかという道を示すもので，こうしろ，ああしろと命令を強制されるものではないとされる。接心とは心を磨く修行なのであり，「当てもの」ではないという。

真如苑の霊能とは，友司の祖母・宝珠院からの伝承とされ，単なる巫女や口寄せのたぐいのように突然の神がかりによって開かれたものではない。それは，70年三代を要して開花結実した由緒あるものと主張されている。

ついで，相承会座について言及を試みたい。そこにおいては，「教徒の菩提心の向上が霊能によって判定され，ひとつの境涯に達すると霊位として与えられます。相承会座には四つの段階がありますが，大乗会に始まり，歓喜会，大歓喜会を経て，最終的な会座である霊能発動修行で，霊能者が誕生するわけです。この霊位向上は，大般涅槃経に“一切悉有仏性”と説かれるように，だれでもが内蔵している仏性を開発することで，真如苑において，霊位を相承することは霊能のより本質的な部分といえる[26]」とされている。

26）ひろたみを『前掲書』46頁。

教徒は，三つの歩みに取り組み，接心を重ね，年齢毎に異なる一定数の導きの子を獲得すると，大乗の会座に参座することができる。五回までを「初座」といい，六回目から「本会座」となり，祈りの深さを霊能者に認定されると大乗という霊位が授けられる。その後も同様の経過により，霊能者になると，今度は接心を受けるのみでなく，授けることをも行なうようになるわけである。しかし，霊能者になっても「苑内接心」と呼ばれる霊能者同士の接心があり，霊能の一層の向上を目指す修行が課せられている。

相承会座の内容は，機関誌『歓喜世界』に毎号「天音」として掲載されているので以下その概略を引用することにしたい。なお，以下のものは，昭和62年10月の大歓喜相承会座の模様である。

読経を終えた修行の場に，会座指導が始まった。

指導教師「今年は，霊能淵源の地に真澄寺別院が竣成し，喜び多かった反面，内から，外から，教団を揺るがせ，崩そうとする悪の力がいっそう強く働いてきました。……一人も多くひらかれるように，教え中心の祈りに，皆がひとつにさせていただくことですよ。」

やがて，霊能者は，護身法を結誦，即時入神していった。霊劇で，最初に示されたのは，迷いの心で，あせりや，いまだ実践の伴っていないあり方であった。

迷霊「私もこのへんで，実りをいただいてゆかなくてはね。今年はいろいろなことがありましたが，こういう実りはいただきましたとご奉告したいですから……。今日は霊位相承まではできなくても，せめて，その手がかりになるところまではゆきたいですね。」……

すると，つぎの霊人は，各人の反省を引きだすように，

覚醒霊「おこなっただけ，歩んだだけ道はひらかれる，といわれますが，ともすると形が先行してしまっていますよ。あれもこれも，やってきたと，つい形を論じたくなってしまうものがあるのです。……」

このように，一年を振り返っての思い思いの心を，修行者は霊劇のなかに

見つめ，徐々に会座の空気は澄んでいった。

ここで，護法神が湧出し一同に

護法神「皆さんは，歩みが喜びになっていますか？　重荷や，苦しみになってはいないでしょうか」と問いかけ，ミーディアムを通しおごそかに霊言がくだる。

護法神「拝，大歓喜とは，歓喜の上に大がつく，それは，喜んで教えの道を歩む，喜んで他のためにお仕えする境涯なのですよ。……」

こうして，霊能者は，それぞれに霊格を顕現し会座を回り始めた。教導にあたる真如教主は，会座の状況を，つぶさに，霊的に確認しながら苑歌を示した。

『耐えがたき事をば　耐えて祈りなば　護法の護りあると知るべし　このことをよく承知して，そして祈りを深めてゆく。自分だけが分かっているというのではなく，これを所属に徹底せしめてゆくこと。大歓喜とは，大菩薩ですよ。しっかり，霊言を身につけて，霊言を消化してゆくこと。』

教導院，真導院にしたがい四方に散った護法神は，やがて，一経親の前にとまった。

護法神「立教から今日まで，教主さまが第一線に立たれ，教徒の身近に，あるときは，ご奉仕の場所にまで自らおみ足を運ばれ，文字通り膝を交えてご親教を積み重ねてくださって，そのみ心に接した方が信心に目覚め，菩提向上してきているのですよ。……」

祈る人，○○○さんは深くうなづき頭上に輪環がかざられた。

教主は，ご霊咒を誦し始めた。高く低く，両法嗣もこれに唱和するなか，おごそかに，大歓喜霊位の相承がおこなわれる。

教導院は，一人でも多くを大菩薩の境涯に至らしめんとの願いから，

教導院「しっかり，祈りこめてゆくことですよ。一時の感激で法悦にひたって，お浄土があるような気持ちになってしまってはいけません。それは，一瞬の間に消えてしまいますよ。真剣に祈り深めていってください。」と教示

した。……

真導院は，念を押すように，

真導院「今，自分が，真実にめぐりあえ，教えという大きな宝をいただいて，ここに祈らせていただいているということ。どれほど大きな意味があるかということを，ようく思惟してみることです。……」

プラズマ物理を研究する広島大学教授の○○○○氏の頭上には，大歓喜の印じがさずけられた。……

さらにすすんで，

護法神「自分はわかっているが，はたして人にわかってもらえるだろうかと，語ってゆくうえで二の足を踏んでいますよ。……」

霊界からの教示に深くうなづいて，○○○○氏，大歓喜相承。

こうして，つぎつぎに28名が大歓喜を相承。一同が至心に唱えるご霊咒におくられて，両童子は降臨した霊界人をしたがえて，霊界の本位に還着した[27]。

以上は，大歓喜の会座であるが，霊能発動修行も基本的には同じである。しかし，「霊呼吸」というものが関与しているのが相違点である。霊呼吸は，体験した者でないと分かりにくいものであるが，一応以下のような説明がなされている。「心霊学的には，マグネタイズという言葉があるようですが，教主さまが送ってくださる霊性に自分の霊性がシンクロナイズ（同調）したときに，“霊呼吸が入る”のです。霊性が磨かれていなければ，ピシャリとシンクロナイズしません。それだけに，会座に立ち会う人は，霊性を磨きに磨いて参座するわけです。まあ，いうならばテレビと電波の関係みたいなものですね。波長，つまり霊性が合わなければ，人を救う教主さまの願いと一体にならなければ霊呼吸は入らないということです[28]。」

27）結城直哉編『歓喜世界155号』真如苑教学部1988年１月，28～34頁。
長男智文は教導院，次男友一は真導院と呼ばれており，この両童子に感応するのは，真如苑最高の霊能者である両法嗣，現在の両常慧である。

28）ひろたみを『前掲書』76頁。

さらに，霊能者になった瞬間に関しては以下のような例があげられている。「無私の瞬間とでもいうのでしょうか。自分がなくなった，という感じなのです。そして次には“家族は鏡，自分の心のバロメーターなんだな”としみじみ思いましたね。……いままでの人生に対するお別れ，という感じかな。自分は生かされている。こんな小さな自分なのに，生かしていただいているんだ，砂の一粒のような自分だけど，使っていただきたいという気持ちで，いっぱいになったのです[29]。」

「とても変な感じでしたね。“自分は愚かで，はしたない人間だな”と思ったのです。そして非常にいい意味で開き直りができたんです[30]。」

「その瞬間，体という体から力がなくなって，空気のような自然体とでもいったらよいでしょうか。何にもとらわれていない自分に気がついたのです。“この命，教主さまにお捧げします”という気持ちと，“命をとられても生き続けます”という覚悟が，素直に自分の気持ちとなって出てきて，しかも，まったく恐怖感がないんです[31]。」

以上のような相承会座は，ふつうの教徒を対象とする接心修行とは異なり，2～4時間もの間，静座し祈りを深めていかねばならない。その際に，双親様，両童子様に思慕の情をよせるのみでなく，今までの自分を反省する事が大切である。それにより，自分のいたらなさを実感すると共に，小我がとれ大我に生きるきっかけとなるからである。

このような現象は，内観法の開発者である吉本伊信が，浄土真宗の「身調べ」の最中に，「世界中の人が助かっても，私だけは地獄行きだ」と判った瞬間の悦びと共通するものがあるといえよう[32]。ひろたみをは，霊能者になった瞬間の体験を聞いて，「『霊能』とは欲しがっても手に入るものではなく，自分をへりくだり，無にした時に初めてその境地に達するといった印象を受

29）『同書』71頁。
30）『同書』74頁。
31）『同書』75頁。
32）三木善彦『内観療法入門―日本的自己探究の世界―』創元社，1978年，214頁。

ける。」と記している[33]。

さらに，霊呼吸は，霊能開発の重要なポイントではあるが，すべてではなく，その後，霊言がスムーズに出るための訓練がなされるようである。修練と経験のつみかさねにより，一人前の霊能者が誕生するわけである。

真如苑広報部の西川は，入神中の状態について以下のように述べている。「霊能者というのは，入神中に自分の意識があるのかないのか。入神から戻って発した霊言を覚えているのかどうか。これは，もっぱら霊界の側の必要性によって，一，二分，自分が残っていることもあるし，まったく無いこともあります。修行の性格，霊界が伝えようとする内容などによって決まるのではないでしょうか。霊能者はすべて真如霊界におまかせです。ですから，結界された清浄な場所以外では入神はしないのです[34]。」

これに対し，山口富夫は，霊能者たちと以下のような質疑応答をしている。

「入神したときはどのような状態になるのですか」

「青空に吸い込まれていくような感じがします。霊能者によってもちろんその状態は異なります」

「青空というと，青い色がみえるのですか」

「いや無色透明ですね」

「霊能者がハイ・ハイというのは」

「霊界からの指示が私たちに正しいということを，自分自身にまた相手に……。そうですよ，という確証みたいなものです」

「入神を終ったとき，入神中のことを覚えていますか」

「はい，全部覚えています」

「むかしは接心中に相手の身体の患部の痛さが自分にも感じてきて，随分苦しい思いでしたが，いまは両童子さまの抜苦代受のおかげで本当に楽になりました」

33）ひろたみを『前掲書』74頁。
34）『同書』

「頭が痛いという教徒と接心するとやはり頭が痛いですね。でも終るとすっと（私の痛み）とれますよ[35]」

これらの発言は，霊能者の体験の多様性をも示しているが，その多様性を収斂しようとする傾向が当教団においては常にみられるといえよう。

真如苑の霊能は，教主が甲陽流病筮鈔を通し父・宝昌院から伝承された天霊系病筮霊と，摂受院が祖母・宝珠院が淵源を開いたものを，伯母・玉恵より相承した地霊系の霊能とが一体となって創始され，両童子の他界により完成されたとされている。

とくに，宝珠院は，日朗上人の真筆といわれる曼荼羅を奉持して，明治初年，早くも横浜で布教し，憑依霊の除霊をし多くの人々を救済した。その一女・玉恵もまた霊能を通して仏の教を説き，横浜で外人の帰依者も多かったという[36]。

真如苑の霊能者は，すべてこの二つの系のいずれかに属し，天霊系は透視型で理論が中心になり，地霊系は感じで判る，剛直型であり，その数はほぼ同数であるという[37]。

教徒の修行は，菩薩の修行であり，いかに努力しても双親の仏の境涯には達し得ないものとされている。霊能者である一職員は，「私達の霊能など双親様に比べたら，まったく取るに足りないものです。」と語っている。

それにもかかわらず，多くの教徒が霊能者を目指して修行に邁進する要因の一つとしては，霊能者になって初めて本格的に因縁が切れ幸せな存在となれると共に，教主様に対して恩返しができると教えられていることがあげられる。教主が遷化した現在，霊呼吸をおくれるのは両定慧のみであり，この二人は教主のすべてを受け継いだのであるから，双親と一体であり，仏の境涯にあるとされている。そして，宇宙の大本位に戻った教主の霊能は，生前より一層強力に全教徒の上にそそがれており，東西の冷戦緩和の動きにも影

35）山口富夫『真如苑―常楽我浄への道』知人館1987年。116～119頁。
36）伊藤真乗編著『一如の道』166頁。
37）山口富夫『前掲書』116頁。

響を与えているという。

5. むすびに代えて

ウェーバーの預言者の分類によれば，伊藤真乗は，たてまえ上は，「宗教革新者」であるが，実際には「宗教創始者」により近いということができよう。なぜならば，伊藤は，真如苑において，法身如来であり，仏陀の再誕ともみなされている存在であるが，教えの内容や組織形態をみると，諸宗教・スピリチュアリズム・易等の折衷により教団を成立さした人物であるからである[38]。

しかし，カリスマという視点からみると，高橋信次や北村サヨのような戦後日本における典型的な真性カリスマとは差異があり，伝統からの断絶・革新という面はそれほど強くはみられない。伊藤の有能さは，諸宗教の接合と組織づくりの巧みさにおいて発揮されているといえよう。さらに，教団の継承という点からみると親子という血脈による継承がなされている。

真如苑は，現在，七百人という霊能者を有しているが，教団の統制から逸脱する者は，教主家族の一員を除いてはほとんどみうけられない。これは，当教団の特質の一つということができよう。

ついで，シャーマニズムは，真如苑の重要な構成要素をなしているが，その形態は憑霊型シャーマの三つの類型のいずれにもなじまないといえよう。それは，真如苑独自の形態にコントロールされているのである。

そして，なぜ，オイルショック以降真如苑の信者数が顕著な増加を示しているかは，重要ではあるが解明困難な課題といえよう。真如苑の信者の多くは，霊能者と対座してなされる接心修行が最大の魅力であると述べているが，霊能者が教団にとって危険な存在であることは，霊友会・ＧＬＡの分裂等によってもうかがい知ることができる。ところが，真如苑の霊能とは，きわめ

38）心霊科学者の梅原伸太郎は，真如苑の霊能者を用いる方式は，日本心霊科学協会やその前身に学んでいるとしている。

てコントロールされたものである。

例えば，霊能者が独自の信者を得て支部を形成することはないという。というのも，当教団においては，信者の系列組織と地方拠点とが分離されており，かつ信者の系列組織を通じての日常指導と接心での霊能指導とが分離されているのである。接心を実施する場所は，最近増える傾向にあるものの一部に限定されている。

真如苑の教勢拡大の要因として，接心修行の魅力以外には，まず熱心な布教があげられよう。信者の布教活動の熱心さは，それほど強引ではないものの教勢拡大期の創価学会をしのばせるものがあるという。というのも，布教の意義が教義化されており，かつ一定の導き数がない者は，相承会座や智流院，さらには一部の教団行事に参加することができないからである。なお，布教においてはマスコミを用いず，身近な知人から始めるのがその特徴としてあげられる。

ついで，オイルショック以降，顕著な神秘主義の流行も無視できないといえよう。しかし，真如苑の霊能はおどろおどろしいものではなく，継続的，日常的なものであり，長期的には人格の変容をもたらすものである。当教団においては，「円満な指導者」となることが目標とされており，事実そのような人物を多く輩出することに成功している。

1979年の時点において，柳川啓一と森岡清美は，今後はそれぞれ自分の価値観に合った教団を選ぶようになるので，大教団は生じないであろうという予測をした[39]。この予測は真如苑の大教団化によって裏切られたが，それというのも真如苑がある程度多様性を許容する教団だからである。

当教団は，創価学会等の大教団と比較すると，組織の拘束も少なく信者としての負担も軽い。家庭集会等においても，疑問に思う点はどんどん質問することが奨励されている。欧米の個人主義とは異なるにしろ，若い世代を中心として，日本人の自分主義あるいは自己本位主義は進展しているといえよ

39）ひろたみを『前掲書』9頁。

う。このような時代に適合できるフレクシィブルな組織原理を真如苑は有しているのである。

最近，とくに若い世代の入信者が増えているが，その要因の一つとしては，教団全体としての洗練されたイメージがあげられる。高級住宅街に拠点を多く建設しているのは，意識的に行なわれているものと推測され，一種の高級感をうえつけるのに成功している。客観的にも，他の新宗教教団と比較するなら，高額所得者やインテリの占める比率は高いと推測される。

さらに，教団の法要等の行事の洗練された佳麗さは，多くの人によって指摘されている。このように，伝統的なものと新しいものとの巧みなミックスが真如苑の成功の大きな要因としてあげられよう。以上のような諸事が可能となったのも，真如苑の職員が東大をはじめとする一流大学出を含む優秀な人材によって構成されているからでもある。それに加えて，教主が芸術家であり，新取の気性に富む人物であるため，職員もその力を発揮しやすかったといえよう。

真如苑の成功は，教団のもつシステムとしての肌理の細かさにあり，さらには機能的優位性にあるといえよう。筆者が，その成功の要因を考える時，いつも思い出すのは，ウェーバーの「官僚制的組織の技術的優秀性」に関する以下の言及である。「官僚制的組織が進出する決定的な理由は，昔から，他のあらゆる形に比べてそれが純技術的にみて優秀であるという点にあった。完全な発展をとげた官僚制的機構の他の形態に対する関係は，ちょうど機械が機械によらない財貨生産方法に対するごときものである。……[40]」

オイルショックから現在という時間的限定をおくならば，真如苑と他の新宗教教団の関係は，あたかも官僚制的組織とそれ以外の組織との関係に比することができるとでもいえようか。

40）マックス・ウェーバー世良晃志郎訳『支配の社会学Ⅰ』創文社，1965年，91頁。なお日常倫理と霊能とを結びつけ，かつ霊能に明確な段階をおき，修行のめやすとしつつ教徒の向上心にうったえた事も教勢拡大の要因の一つとしてあげられる。

A Study of Shinnyoen

Kenya Numata

Shinnyoen is a new religion both for priests and laymen. The canon of the order is the Great Nirvana Sutra. Shinjo Ito, the Founder of Shinnyoen, together with his late wife, Mrs. Tomoji Ito, perfected the easy and modern interpretation of this Sutra. Shinnyoen has a unique way of training called "Sesshin Training." Today about 700 Reinoshas (spiritual leaders) are playing important roles. Through Sesshin Training, the cause of suffering can be known to a follower. Most evil cause which results in suffering can be eliminated by prcticing the Teaching. Thus, Buddha Nature innately held by all people can be developed.